

乳鉢



「99の幸せ」

大分県医師会 緒方菜穂子

30代後半，今の夫に出会った頃に聞かれた問いがある。

「99回の幸せにたった1回の不幸がある人生と，99回は不幸だけど1回だけ幸せが訪れる人生。君はどちらを選ぶ？」

大学卒業後は仕事ばかり，忙しくて当時の流行は今聞いても「？」の20代。30代やや余裕は出てきたけど，やっぱり仕事中心でシングルライフを謳歌していた。気力も体力も充実していたあの頃，そんな1回の不幸を我慢すればいいのだから99の幸せのほうがいいじゃないと即答しそうになった。いや待てよ，1回の不幸がとんでもないことだったら。でもとんでもない不幸ってどんなこと？病気・事故で働けなくなること？医療ミスで訴えられるとか？ギャンブルはしないし結構用心深いから詐欺に引っかかって大借金を背負うとかもなさそう。この歳で大失恋？親兄弟をなくすのは時間の問題だから避けられない。当時の私の想像力ではとんでもない不幸の限度はこのくらい。なんとなく答は保留でそのままになっていた。

さて，花の40代。開業，遅まきながら結婚出産と人生の転換期を迎え，仕事・家事・育児でバタバタと日常が過ぎていく。クリニックは4年目を迎えまあまあ安定しやれやれ。昼間は（幸か不幸か）のんびりと仕事をし，帰ってからは娘の奴隷。私の趣味ってなんだったっけ。足繁く通った都町にもしばらく行ってないなあ。前回美容院に行ったのは数ヶ月前……。授乳終わったら（更に）太った。それでも父親と並んだそっくり娘の顔を見ていると，私は幸せだと思う。娘が生まれた年の年賀状に添えられた言葉で印象的だったのは元同僚のナースからもらったもの。「先生は仕事・結婚・出産と女の幸せをすべて手に入れたんですね！」ウーンそうか，そうなのかも知れない。そうすると後は不幸がくるだけってことですね，神様。

そして先の震災と大津波。そこで思いだした冒頭の問答。まさに全てを1回で失う不幸があるのだと今更ながら思い知った。フィンランド北部の冬は，夏の白夜とは真逆で太陽が全く出ない極夜というらしい。白夜よりも極夜のほうが好きだという作家は，「夜が暗ければ暗いほど，その中に灯る小さな明かりがとても明るく見える」と書いていた。

それでも欲深い私は，明るい夜と99の幸せをあきらめきれない。今でも時折我が家の食卓の話題に上るのだが，まだ自分の答を口に出せないでいる。

ちなみに夫の答は「たった1回の幸せをかみしめる，それが僕の人生だ！」

乳鉢



できる事とできない事

大分県医師会 緒方 俊一

開業して以来カラオケに行くと必ず宇宙戦艦ヤマトを歌います。私に「イスカンダルに行く覚悟ができていいのか!」と問いかけます。かなりの数の日本人ができそうもない問題に対して「できないかもしれないので・・・しない」という姿勢になっていないでしょうか。安定した時代が長く、変化を嫌う姿にもどかしさを感じます。「できないかもしれないけど・・・やってみる」は過去の遺物になっている様です。「汚染」された地球を救おうとする自己犠牲に満ちた日本人はどこに行ったのでしょうか。

現在、震災直後の3月から12月まで3か月おきに被災地を訪問しています。仙台市や石巻市では町中から瓦礫が撤去されあたかも旧に復しているように見えますが、南三陸町や陸前高田市では瓦礫は山積みされたままです。新聞紙上には放射線被爆を恐れて瓦礫の受け入れを止めた自治体の話がよく出てきます。このことが復旧を遅らせることは明らかですし、瓦礫の処分は誰の目にも優先順位の高い問題です。残念ながら問題と解決方法を設定して困難さに向かって隙間を縫って(議論、葛藤、調和、合意を経て)少しでも前に進んでいくという姿勢は国家にも、多くの国民にも見えません。放射能汚染が不安でできないと考えるのか、それでもやってみると考えるのか。放射線量の測定はもちろん神経質なほど行われており、その網の目をくぐってまで到達するものまで選別することは技術的に難しいと推測されます。福島には既に桁違いの放射線量が測定されており同じ日本に住む国民として極めてアンバランスな生活環境に置かれています。同じ国に住みながら本人たちの努力では解決のできない問題です。少しずつでも瓦礫を受け入れながら放射線量を測定し、放射能が検出されなければ瓦礫の処理を続けるという考え方にはならないのでしょうか。

視点を移して、政治にも同様な問題が起きていないでしょうか。増税、国家予算の縮小、無駄の削減、経済的不公平の解消、中国やアメリカといったわがままな国を相手にした外交、イランへの経済制裁、困難な問題は先延ばしにするだけです。傷がついても間に入ってイニシアチブをとる気概はありません。消費税の増税は優先順位が高く、国債を発行するばかりではいずれ国家予算が組めなくなる事が判っているのに選挙で負けそうだからできません。票を持つ人達を敵に回した政策は先延ばしにされ、ますます官と民の間のアンバランスは広がります。社会保障も同じではないですか。予算が無いのに社会保障は今までのまま維持しようとしています。高齢化社会になれば当然医療費の高騰は起きます。ところがコストパフォーマンスを忘れ、平均的な医療の質を議論することなく

特殊な先端医療に多くの予算を投入し、小さな利益の奪いあいを演じる自分たちになっています。政治の話では無く、日本人のアイデンティティーとして捉えられますか。

今回の震災はボディーブローのように日本の経済を押しつぶしていくはずですが、その歴史の証人となるためにも震災への支援と、視察を続けていきたいと思っています。私は宇宙戦艦ヤマトのクルーになっているつもりの単なるナルシストなのか、鏡に映る私の姿を見ている別の私が、ドンキホーテだねと冷やかに笑っています。何も君がやらなくても・・・。

12月の訪問で入手した現在の問題点を列記します。都市計画が策定できず、建築許可が出ない。以前許可が出なかった場所も建てられるようになったが、その際は集団移転の対象にならないという条件が付いた。指示に従わない人は助けないという事なのか。

集団移転の対象となる土地を不動産屋が買いあさっている。大工さんが不足しており新築の家は2年待ちである。大工さんの日当が高くなっている。港は最大2m程度地盤沈下しておりこれをどのようにかさ上げするのかが決まらない。相川小学校では震災前に子供が70人いたが28人に、吉浜小学校では56人が18人に減った。町の空洞化が始まっている。住宅ができて学校や病院が無ければ生活ができない。住民がいなければ学校や病院を作る意味が無い。復興は町全体が同時に立ち上がらなければならない。

子供たちの心のケアを心配する大人たちの心のケアが心配である。子供たちは見かけ上元気であるが年齢が高くなるほど震災の記憶が残る。被災地の人達にかなり高度なカウンセリングが必要だが、カウンセラーを集めることは困難である。生活支援の一時金を200万円もらったがパチンコに使ってしまった人がいる。中にはアル中になった人もいる。仕事が無くお金を持てば当然の結果にも思える借家していた人たちで被災していないのに無料の仮設住宅に移って生活が楽になった人がいる。仙台市では震災以前よりはるかに好景気で震災バブル、あるいは復興バブルになっている。復興のスピードにこんなに差があってよいのか。赤十字からの支援はまだ来ない。(もう来ない?)

ボランティアに優しくされることに慣れて支援から離れられない。各地からの旅行の申し出があり、支援の旅行を渡り歩く人たちがいる。夏の間には瓦礫からハエや蚊が大量に発生し、ハエ取り紙がありがたかった。その瓦礫を受け入れない自治体が多く、自分勝手としか思えない。失業保険が3月に切れ、これを境に一気に人の流出が始まる可能性がある。津波に対する意識の違いがあり、岩手県に比べて宮城県では死者が多い。

ある場所は一気に波が押し寄せたが、緩やかに増水し4日間水が引かなかった場所がある。チリ沖地震で南三陸町は56人の死者を出しており、経験者は即座に山に逃げた。そのすぐ隣町の相川ではチリ沖地震の津波は潮が引いただけだったのでゆっくり逃げてやられた。津波は海からも、川からも、一旦川や谷を遡った津波が山をなぞって背部から人を押し流した。

乳鉢



リレー・フォー・ライフ(RFL)

大分市医師会 上尾 裕 昭

グラウンドを歩き続けるイベントを通じて、がん患者さんを勇気づけ、その収益金はがん撲滅に役立てようという趣旨のRFLは世界各地で開催されています。大分では、自らも患者さんである坂下千端子医師(元・本会員)の熱意と呼びかけにより、2008年に九州で最初の大会が実現し、山岡憲夫医師(本会員)が大会委員長を務めて今年で4回目。今では65チーム、延べ5,500名が参加するビッグイベントになっています。

がん患者さんのファースト・ウォーク(写真1)を全員が拍手で讃えた後、各チームはチームフラッグを持ってタスキ・リレーをしながら歩きます。グラウンド中央のステージではボランティアによる演奏や踊りが続き、夜になると2,000個のルミノリエ(ロウソクの灯った紙袋)が並び(写真2)、そこに書かれているメッセージには目頭が熱くなります。24時間目のラスト・ウォークでのハイタッチは達成感とファイトを生み出し、「来年も参加しよう」という人達が年々増加しています。



写真1



写真2

私もRFLの魅力に惹かれていて一人で、自施設チームと高校同窓会チームの2種類のTシャツを持参して毎回、参加して来ました。

前者は「チーム・なでしこ同窓会」(写真3)。2002年の開業時に「入院患者さんに向けた医師によるスライド説明会」を看護師長が「なでしこ会」と名付け、その翌年から始まった「患者さんとスタッフのランチ会」が「なでしこ同窓会」(ちなみに「なでしこジャパン」の命名は2005年)。乳癌手術が1,600例を越した今、一堂に会することは難しくなりRFL会場が「なでしこ同窓会」の場となっています。チームテントには患者さん達が集い、

グラウンドを談笑しながら歩くことが定番となりました。

後者は「チーム・みはるかすくに」(写真4)。出身高校の校歌の一節です。各世代の同窓生が今年も40名が参加。嬉しいことに母校のボランティア部の生徒も制服姿でRFL運営の手伝いをしています。「きっと親孝行な人物になるに違いない。この中から大分県の医療を支える人材が育つかも」と感じるのは私一人ではありません。



写真3



写真4

昨年のRFLでは、中学・高校の同級生達がボランティアで演奏をしてくれました(写真5)。薬剤師の杉原崇君が還暦(昨年)を契機に同級生4名で結成した素人のエレキバンドですが、ビートルズナンバーや往年のポップスを約30分。その中の特別コーナーでは内科医の大久保卓次君(会員)が「白い珊瑚礁」、私は「亜麻色の髪の乙女」のボーカルを務めるといふ蛮勇を奮い、患者さんや御家族、同級生、身内の笑顔を誘いました。後日、杉原君が「車椅子に座った人も、バンダナで脱毛を隠している女性も、みんなが喜んでくれて演奏しながら嬉しかった。誘ってくれて有り難う」と語ってくれました。バンドメンバーにもRFLの魅力が伝染したようです。



写真5

RFLに参加したキッカケは、当院の医師の中で最年少の久保田陽子君の勧めでした。RFL実行委員として献身的に頑張る彼女の姿勢に、20才以上年上の私が感化された形です。私の10才年下の渋田健二副院長も、20才年下の甲斐裕一郎病棟医長も同調し、今では休診にしてスタッフ全員が参加する恒例行事となっています。

リレーフォーライフ・・・「人生のタスキ・リレー」と私は心の中で訳しています。

乳鉢



私の趣味と健康

大分市医師会 南原 繁

開院して10年目になります。

仕事以外で良かったと思えることは種々の職種の方と幅広く知り合うことができ、お付き合いできるようになった事と心身的に健康的になったことです。

私の唯一の趣味は、下手ですがゴルフです。

多くの機会ゴルフの上手な方と知り合いになり、練習やラウンドをする機会に恵まれるようになりました。

クリニックのコンペも毎年1回開催していますが、参加者も多くなり最近では毎回14組になるほどです。各クラブのチャンピオンも多く、地元のプロにも参加していただいております。

しかし私のスコアの方は全然進歩がないのが残念ですが...

嬉しいのは家族もゴルフをするようになり、一緒にできる楽しみが増えたことです。さらに練習を積んでレベルアップし、皆と楽しいゴルフができるようになったらと思っています。

次に健康面ですが、以前は不摂生でメタボ気味になりかけていました。

自分がメタボになっては患者さんに説得力もないので一念発起して4年前にスポーツジムに入会し、8kgくらい体重が減りました。抵抗がありましたがエアロビクスなどにも参加して楽しく盛り上がり、自分では勝手に若返ったような気分になっています。

しかし本当は酒を飲むのが好きな私が、安心して飲むには運動するしかないというのが不純ですけど正直な動機かもしれませんね。

そのような時期の3年前、ランを趣味とされている山内循環器クリニックの山内先生に誘われ、初めてとみくじマラソンの10kmに妻と一緒に参加しました。完走はできましたが、残念ながら妻には負けてしまいました。

その後、数回の10kmレースに参加し、昨年末には初めて青島太平洋マラソンのハーフに参加して完走することができました。(もちろん、山内先生はフルマラソンです。)

先日の11月13日には、とみくじマラソンで4回目のハーフマラソンを走ったばかりです。平凡なタイムですが、私にとっては自己最高の1時間51分47秒でした。

高校時代は8kmの校内マラソンで1回も完走したことがなく、半分は歩いて女子にも抜かれるくらい走ることは好きではありませんでした。しかし今では多くの仲間と一緒に参加し、完走した後に喜び合えることが嬉しく思えるようになりました。

次は12月11日の青島太平洋マラソンで初のフルマラソンにエントリーしています。

是非とも完走して一生の思い出作りができたらと思っています。

最初で最後のフルマラソンのつもりで頑張ってきます。

乳鉢

私とコンピューター



大分都市医師会 白坂千秋

最初のコンピューターとの出会いは、故辻秀男教授に購入していただいた初代9801だった。まだ8ビットCPUが主流の時代に、16ビットのCPUであるintel 8086を搭載し、メモリー128メガ、8インチフロッピーディスク2機を持つという当時としては最先端のマシンだった。

総額100万以上したそのマシンを何に使っていたかと言えば、研究用の膨大なデータの平均値と標準偏差を計算し、有意差検定をやることだけだった。何とも勿体ない話だ。

ただ、9801が手元に入るまで使用していたカシオの計算機(まだ1万近くしていた)にはルートキーがなかったから、標準偏差を出すのには相当時間がかかっていた。

だから、夕方辻教授から「白坂君、の条件で2群に分けて有意差検定してくれたまえ」などとの電話が掛かってくると、夜を徹して計算する羽目になっていた。

それが9801のお陰であつという間に平均値と標準偏差が出、検定もすぐに済むようになり、電話が掛かってきてから1~2時間で結果を報告できるようになった。100万の投資で時間を買ったと言うことかもしれない。

その後データベースソフトを手に入れ、結果を出すのがさらに早くなった。けれど、そのソフト、欠損値をゼロとみなすものだから、欠損値があるとやり直さなければならなかった。だから、結果を報告するまでには結構時間がかかっていた。

研究が済んで数年経ってからエクセルを手にしたとき、このソフトがあればもっと早くに研究が仕上がっていたのにと、悔しく思うと共に、早く生まれすぎたと感じたものだ。

長い間98シリーズを使っていたのだけれど、県病時代に知り合った知人の紹介でIBM互換機に乗り換え、以来以後はずっとIBM互換機、しかもショップブランドものを使用している。ショップブランド品は多少のリスクは伴うもののメーカー品の2、3年は先を行っているので、長く使用できるからだ。

現在、10年前に購入したデスクトップにORCAを、5年前に購入したノートブックにOpen Dolphinを導入して試験運用している。2台ともさすがにCPUは古くなり、ハードディスクも少ないけれど、結構サクサク動いている。

頭蓋骨の中にあるCPUが相当古くなり、記憶容量もきわめて少ない私でも、まだまだ頑張れるぞとブラウン管モニターを眺めながら思うこの頃である。

乳鉢



世界一周旅行

大分県医師会 内田 研

三愛メディカルセンターのお世話になり、もう3年が経ちました。開業医の先生方、医師会の先生方には大変お世話になっております。この機会にお礼申し上げたいと思います。5年前に医局の人事を外れて平成18年7月より平成19年3月までの約9ヶ月間で世界一週旅行に行ってきました。アジア、アフリカ、ヨーロッパ、北欧、北米、中南米、オーストラリアと30ヵ国以上行くことが出来ました。もっとも印象に残ったのはアフリカで、国立公園に行き、雄大な大自然と自然動物をたくさん観ました。人の手が加わらなくても自然界の摂理が成り立つ事に大変感動しました。人間が中心ではない、まるで違う社会の様でした。何万頭もいるヌーやシマウマの群れの大移動や肉食獣が草食動物を食べている所等大迫力です。

又、キリマンジャロ登山に挑戦し、標高1,000m未満の街から始まり、4日間で標高約5,900mの山頂を目指しました。3日目より高山病による頭痛が始まりました。頭痛で苦しい中、食事は、半分も取れませんでした。4日目は2,3時間仮眠をしたら、夜の12時頃もう出発し、山頂を目指します。気温は-20度でグローブはしていますが、手の感覚はほとんどありませんでした。頭痛は高度が上がるほどひどくなり、呼吸を整えないと1歩を出すのも困難となってきます。意識が朦朧としてきて、立っているだけでも精一杯となりましたが、何度も転倒しながら、何とか登頂する事ができ、朝日を見ることができました。通常は感動するんでしょうが、意識が朦朧としていて笑顔もできませんでした。すぐに下山を開始、しかし歩き出して約300mのところで倒れました。ガイドに叩かれて目が覚めると、四肢に力が入らず、自分で立ち上がることが出来ません。ガイド二人で山小屋まで両脇を抱えられ、やっとの思いで山小屋付近にきた時には、少し力が入るようになり、何とか歩けるようになりました。助かったと心底思いました。テレビでタレントがキリマンジャロを登頂しているのを観て、ぼくも酸素、装備、プロの登山家等がいればとちょっと嫉妬しました。

旅行中は、自分が日本で整形外科医をしていたことが信じられないくらい旅が日常になります。手術などよくあんな恐ろしいことをしていたなんて思っていました。今は、日本に帰り、整形外科医として、毎日外来、手術の日々の中、あの時、危険な国々を一人でよく回れたなと思っています。

乳鉢



「追悼・原田芳雄」

大分市医師会 伊藤 龍太郎

今、この天井が落ちてきたら、このすさまじい混雑も少しは解消されるだろうか。10代の僕は、そんな不遜なことを考えながら新宿駅西口を歩いていた。8月の一番暑い日で、こみ合う人の汗に濡れた腕が、容赦なく僕の身体にまとわりついていた。ふと突然、前方に人が微妙に距離を取ったような空間が開けた。明らかに中心にいる人物を避けたため生じた隙間だった。サングラスをかけ、細身だけど、ごつごつしている強面。やくざなんかじゃないんだけど、危険を感じてみんな自然と避けていたんだろう。

それが原田芳雄だった。

当時の原田芳雄はまだそんなに知られていなくて、でも僕は、その年公開された「祭りの準備」や「竜馬暗殺」などですっかりファンになっていたのですぐにわかった。僕の話す言葉も、行ったことさえないやさくれた高知弁になっていた。

思い切って彼の前に立ち、「握手してください!」と話しかけると、彼は戸惑ったように一瞬動きが止まり、でもすぐに僕の手を握り返してくれた。殴られたらすごく痛そうなごつごつとした手、ぼそぼそと「ありがとね。でもよくわかったね」。そりゃみんな避けてますから、すぐにわかります、と言ったような記憶がある。手がしびれた。

原田芳雄は、130本以上の映画に出演した、監督や観客に愛された俳優でした。ありとあらゆる役をやっています。でも、そんな彼には一貫したイメージがあります。

群れない、折れない、歯を食いしばる。

アウトローでした。最後まで。やさくれた役であろうが、公僕の役であろうが、たとえ孫の成長に目を細めるおじいちゃん役であっても、彼は常にアウトローでした。みんなに慕われているのに、決して「原田組」を作ることはありませんでした。

まわりがどうであろうが、己の正しいと信じていることをこつこつとやる。こんな難しい時代、このような生き方には非常に困難がつきまとうであろうということは、容易に想像がつかます。原田芳雄はその生き方を貫いて生き抜きました。大分県出身の偉人、広瀬淡窓が説いた「敬天」思想に通じると思いますが、こんな時代においてはアウトローでなければそれを体現出来ないのかもしれないな、と私は思います。何が正しいことなのか、善きことなのかわかりにくい時代、正しいと信じていることを積み重ねてゆくことは、今の時代では天より報われるのではなく、その人をアウトローにしてしまうのかもしれない。

群れない、折れない、歯を食いしばる。原田芳雄の映画を観ながらそんなことを考えています。アウトロー、結構じゃないか。でも、折れんなよ俺、という話でありました。

乳鉢

「ルーツを知る」



大分市医師会 首藤 純

南海病院時代に一緒に仕事をさせて頂いた星野先生より、リレー随筆にご推挙を頂きました。テーマを思案しておりましたところ、我が家に伝わる「家系図」を思い出すに至りました。

その家系図は、実家の仏壇下に保管されております。これによると、現在の当家の直接の初代である耕右衛門（1804-1892）は、大分市鷺野に在住となっております。また、萬壽寺の古くからの檀家であったため、紫山老師の描いた耕右衛門の肖像の掛け軸も残っており、名字帯刀を許されていた庄屋であったことが伺い知れます。また家訓の巻物には、本業に専念し、博打は打つななど、20項目あまりの少々耳の痛い、ありがたいお言葉が、漢文で記されております。

四代目 幸人が首藤家最初の医師（熊本医大卒）となり、大正10年、大分市鷺野で首藤医院を開業、その後滝尾富岡に移転し、当時はまだ村であった鷺野、滝尾地区を無医村から救ったのでした。当時住診には馬で出かけていたようで、その写真も残っています。

昭和に入り、第二次世界大戦の戦火の中で、首藤家は存亡の危機に立たされます。小生の大叔父にあたる五代目 洋三（1925-1945）が、長崎医大2年在学中に、長崎原爆により亡くなり、跡継ぎを失ってしまうのです。この危機を救ったのは、幸人の長女 寿美（小生の祖母、故人）が嫁いでいた緒方町 阿南家でした。

阿南家は阿南重内（小生の曾祖父）からの医師の家系で、大正6年から緒方町小宛で開業医をしておりました。寿美は、阿南大一郎（小生の祖父、元大野郡医師会会長、阿南医院、故人）との間に、長男 征治（元阿南内科、豊後大野市医師会立豊西苑施設長）、次男 洋治（首藤歯科クリニック院長 元大分県歯科医師会副会長）、三男 敏郎（大南クリニック院長）と3人の男子を設けましたが、昭和42年、首藤家の存続のため、次男 洋治（小生の父）を寿美の実家である首藤家の養子と致しました。これにより、首藤家の危機は救われ、ここに首藤洋治を六代目とする、新生「首藤家」が誕生するのです。

小生は首藤家七代目。歯科医師となったあと、東海大学医学部に学士編入してまで医師になったのには、首藤医院を復活させたいという思いがありました。また、この大分市滝尾の地での開業にこだわったのは、「地」と「血」に懸けた執念がありました。「ルーツを知り、家を守る。」こんな時代だからこそ、大事なことなのかも知れません。

乳鉢



当院の受診理由について

大分市医師会 星野 鉄 二

今回「リレー随筆」を読んでいただける先生方と共有のできる話題はないかと考え、問診表に記載してもらうようにしている当院（泌尿器科医院）を受診した理由についてまとめることにしました。

調査は受診の理由に関して、現在、当院で採用している広告媒体に合わせて項目を作り直した2010年8月から2011年5月までの新患者 520名について行いました。

- (結果) 1) 近隣だから 30.7% 2) 他院からの紹介 17.2% 3) 知人の紹介 11.9%
4) ホームページ 8.0% 5) 電話帳 7.6% 6) インターネット 7.4%
7) 交通の便がいい 4.5% 8) 看板 4.5% 9) 携帯電話 3.9%
10) 新聞 1.8% 11) 雑誌 1.0%

潜在的な患者は多いと考えられる科ですが、泌尿器科の疾患は主に内科で経過をみられており、また、泌尿器科のイメージも良いものでなく、患者様に敬遠されがちな診療科です。

今回の結果では3割の方は近隣の患者様に受診していただき、やはり地域に密着した診療が必要で、内科を標榜せずに地域の泌尿器科開業医としての役割を果たすことにより、多くの近隣の先生から紹介をしていただいています。今回の調査は開院して1年以上経過してのものですが、口コミでの受診が、いずれの広告媒体をも凌いでいます。やはり、どんな宣伝よりも地道な診療ということのようです。まだ電話帳をみて受診していただける方も多くいますが、コストパフォーマンスは決して高くないようです。患者の年齢層の高い泌尿器科でもホームページをみて受診していただける患者様のほうが電話帳より多くなっています。またコストのかからないインターネットの情報をみて受診する方は電話帳並みの割合でした。携帯電話のiタウンページを見て受診される方は意外に多く、電話帳ほどのコストもかからず、今後は電話帳よりもいい広告媒体になるかもしれません。当院では作成にコストが掛かる上に維持費もかかる街頭看板を立てていません。維持費の掛からない看板を病院敷地内のみ設置しており、看板がどれだけの効果があるのかは、今回の調査では不明でした。新聞に関しては毎日、夕刊にとても小さいサイズの広告を掲載していますが、あまり意味はなく、雑誌に関しても掲載の形態を再考する必要がある結果となりました。

以上、簡単ではありますが、若輩者の調査結果を参考にさせていただけると幸いです。

乳鉢

「真理」



大分市医師会 阿部 寿 徳

東日本大震災での空前絶後の大災害にて、被災された方々に心よりお見舞い申し上げますとともに、お亡くなりになった方々のご冥福をお祈り致します。

近年、世界各地での地震や津波、竜巻などの自然災害の頻発とその甚大な被害が大きく取り上げられています。また新型インフルエンザや口蹄疫、O111大腸菌などの感染症、さらには残忍非道な殺人や虐待などの事件報道も後を絶ちません。

人類が抱える様々な問題は、やはり人類の進歩により解決・根絶してほしいものですが、次々に新たな困難に直面しております。

自然現象による天災を現在の科学で防ぐのは不可能です。しかし、その被害や2次災害に関しては、人知を駆使すればきっと抑えることができるはずですが、地震や津波は防げないが、津波被害や原発事故は抑えられると思います。そして復興支援はどのような方策をとるのがよいのかきちんと考える必要があります。原発の功罪については周知の如く、その恩恵や危険性、利害関係や事故被害などを踏まえ、今やるべき事と今後の方向性を考えなければなりません。また世界的あるいは身近な感染症においてもまた然りです。今こそ、人類の大同団結を切に願うところです。

人間というものは、元より十人十色であり、なおかつ各個人それぞれの中にも色々な考えを同時に持ち合わせているものなのでしょう。善悪、愛憎、奉仕と打算、等々・・・。立場が替われば意見も変わるといわれますが、むしろそれらが本来の姿かもしれませぬ。ビンラディン容疑者は西欧諸国ではテロ首謀者であり、彼の殺害やテロ撲滅は正義であるとの共通認識です。しかし一部のイスラム諸国では、端的に言えば彼は英雄であり、テロは聖戦といわれています。そのような食い違う埋まらない溝は、身近な人間関係においても容易に起こり得るものです。一人の個人の中でも、変心したり矛盾が生じたりする。ましてや集団では、なおさら複雑な問題に発展してくるものです。それが人間というものであると一言で片付けてしまうのは簡単ですが、人間だからこそ何とか困難を解決して乗り越えていくこともきっとできると信じたいものです。

地球と人類。自然の真理と人間の真理。その調和と融合は、未来永劫の壮大なテーマでしょう。

そして私は、ちっぽけだけど目の前の節電にまずは頑張ってみようと思います。

乳鉢

がんばろう！ 日本



大分県医師会 太神尚志

東日本大震災にてお亡くなりになった方々に対し深い哀悼の意をささげます。
また被災された方々へ心からお見舞い申し上げます。

平成23年3月11日は金曜日で、午後は患者様で院内が少しにぎわうはずがいつも様子が違いました。来られていた顔なじみの患者様とお話しをして初めて大震災が起きたことを知りました。テレビを置いていないため全く情報がなかったのです。また診察中で携帯電話をマナーモードにしていたため、防災メールが来ていたことにも気が付きませんでした。診察が終わって携帯電話のメールをみて初めて私の診療所近辺に、なんと「避難勧告」が発令されていたことが分かりました。速やかに「高台」への避難をお願いします、とのことでした。

自宅に戻りニュースを見るにつれ大変なことが起きたのだ、と実感しました。

直接被災したわけではないのですが、あまりにも悲惨すぎて精神的に非常にショックを受けました。しかしその後開催されたセンバツ高校野球の開会式で選手宣誓する岡山創志学園野山主将の宣誓する姿、宣誓文に感銘を受け、今の自分にできることをがんばり少しでも被災者の方々にご支援できれば、とおかげで気持ちを切り替えることができました。

いろいろな方がそれぞれのやり方で支援活動をされています。なかでも石川遼君は今季の獲得賞金全額、パーティー×10万円を寄付されるとのこと。お金だけでなく、被災地へ出向いて炊き出しをされる方、何とか勇気づけようと頑張るスポーツ選手など。チャリティーマッチでゴールを決めた44歳の三浦カズのゴールは本当に強いメッセージが込められていると思いました。

私事ですが、4月で開院1周年となります。大変なことも多く塞ぎ込むことも多々ありますが、被災者の方々の苦勞に比べるとちっぽけなものです。

いまなお避難所生活をしている方々、不眠不休で災害復旧活動をされている方々、危険を顧みず原発事故処理に携わっている方々などの事を考えながら、「がんばろう！日本」を合言葉に私なりに頑張り、私も被災地へ向けてエールを送り続けたいと思います。

乳鉢



野遊びのススメ

大分市医師会 田中拓司

「今度、吉和に行かんか？」今から約十年前、勤務先の内科部長から声を掛けられました。吉和とは広島県の山間部にある村で、どうやら蝶採集が趣味らしい部長の行きつけの場所のようでした。赴任した日に「君は山派？」と聞かれ、私は迷わず「海派です」と答えました。大学を卒業してからも暇をみつけては住吉浜でウインドサーフィンをしていたからです。「あっそ」と素っ気なく言われたものの、それ以来部長は読み古した登山雑誌をそっと医局に置くようになっていました。

「とりあえず寝袋と防寒具は持ってきてね」半ば強引に行くハメになったものの、薬局や他科のドクター達と「蝶の卵採りを手伝わされるんやないか」と不安を感じていました。部長の狭いデリカに揺られて着いた所は、十方山林道という広島と島根の県境の山奥でした。高速を降りて約2時間、最後に見た民家はいつぞやという状況です。「やっぱり・・・」不安が的中した私達を尻目に、部長は手際良く野営のセッティングをしていきます。

そして夜・・・

ヤマメを炙りながら焼酎をチビチビ、ランタンのシューツという音と清流のせせらぎをBGMに、空には満天の星・・・揺らぐ焚火の炎を見つめながら星の話や旅の話、人生の話をして夜が更けていきました。

「何なんだこの世界は！」部長の奥深い話と山の世界に大きくカルチャーショックを受けて打ちのめされた私は、それ以来暇をみつけては登山や沢巡りをするようになり、ついには雪山登山をするまでに山の魅力に取り憑かれていました。

一昨年開業してからはしばらくは遠征していませんでしたが、最近少しずつ余裕が出来て遠征範囲を再び広げつつあります。

大分近辺には魅力的なウィルダネスが沢山あります。北川支流のクリークではセルピンでシュリンプが獲れます。カヌーで遊んで、獲れたての手長エビで作る絶品パエリアに舌鼓を打てます。祝子川や鹿川ではカモシカに胆を冷やせます。これからも自然を楽しみながら良い仕事をしていければと思っています。